

変わらない生活ができることの有難さ

山梨大学教育学部附属中学校 1年 大野 ひなた

私には七十歳を超えているのにまだまだ元気で働いている健康な祖母がいる。コロナ禍の中、泣く泣く廃業したり、閉店間際でやっているというニュースを耳にする。緊急事態宣言下の地域では、時短営業や休業要請で、これ以上営業を続けられないという店主の声も毎日のように報道されている。私の町、小淵沢は避暑地で有名で、夏の観光客を相手にした商売をしている友達の家がたくさんある。お店を開けなければお客さんは来ない、来なければ収入にはならないなど、私の心配は尽きない。

祖母の勤務先も事業を縮小してやっているようで、祖母は出勤せずにいる。つまり、仕事がないのだ。外交的な性格で人に接するのが好きな祖母に仕事がないなんて、すぐに年をとってしまうのではないかと心配していた。働く時間も給与もそんなに多いわけではないが、外で働く時間は祖母の楽しみで、その給与で孫に何か買ってあげるのを生きがいにしてしているからだ。そんな仕事のない生活を始めて一年、先の見えないコロナ禍の話をしていて、祖母の勤務先に給付されている緊急雇用助成金について知った。祖母は実質、勤務をしていないが、勤務時と同額の給与を変わらず受け取り、祖母の勤務先はその給与を国から助成金として受け取っているということを知った。コロナ禍の雇用を維持するための助成金で、全国でおよそ二百二十万件支給され、金額も二兆円を超えたということも知った。多くの件数と金額にはもちろん驚いたが、それは雇用がない人の多さだということが分かった。また、国はそれだけ多くの人を雇用という面で支えているんだと知った。祖母もその恩恵を受けている人の一人で、今も変わらず生き生きと生活できているのはそのお陰なのだ。給与だけの問題ではない。この制度は雇用を維持するという目的があり、祖母は仕事を失わないという保障もあるのだ。いつでも仕事を開始できるという思いが、祖母の健康を、生き生きと生活する姿を支えてくれている。私は中学一年生で私は払う税金は消費税以外にない。しかし、税金の恩恵はたくさん受けている。国からは、一人十数万円の給付金・マスク不足の時期に使いまわせるマスクの支給、市からは、地域で使える一人三万円分の商品券支給・倍額の額面の商品券などたくさんある。先月には十三歳の私にもワクチン接種予約券が届いた。それらはすべて税金から出されている。

今、不自由な生活をしなければならぬこともあるけれど、それでも変わらない生活ができているのは税金のお陰なのだと思う。私が働くようになったら、国民のために使われる税金を進んで納められる大人になりたい。そして、その税金をみんなが豊かに健康的で安心して生活できるように使ってほしいと思う。